

<後期・講義計画の変更>**2 宗教社会主義への展望**

## 1 政治神学の可能性

政治神学とは何か—モルトマン、ゼレー 10/26

政治神学と日本の文脈 11/2

政治神学と経済—富の問題— 11/9

## 2 正義と愛

現代政治哲学と正義論—ロールズ— 11/16

正義と愛の相補性—リクール— 11/30

正義と愛—キリスト教思想の問いとして— 12/7

## 4 展望—宗教的社会主義の射程— 12/14

Exkurs 現代キリスト教思想における宗教と科学 10/12

**2 宗教社会主義の射程**

## 1 政治神学の可能性

1-1: 政治神学とは何か—モルトマン、ゼレー

## (1) 政治神学の射程

## 1. 思想史上の具体的な事例に即した議論とその一般化

・ストアの神学体系の一部門としての政治神学

・国教化以降の状況下での神学

二王国論、正戦論

・特定の政治的立場へコミットする神学

## 2. 政治と神学の関係をめぐる議論の全体

神学的な政治理論

政治をテーマとした神学

## 3. 政治の神学 → 政治的解釈学

・政治を神学する。神学の基本的特性としての政治性（政治的次元）。

・神学する視点としての「政治的なもの」

「神学」と「政治的なもの」の理解が問われる。

宗教・信仰と個人・共同体との関係性をめぐる理論化が必要である。

(2) Dorothee Soelle, *Politische Theologie. Auseinandersetzung mit Rudolf Bultmann*,

Kreuz-Verlag, 1971.

*Political Theology* (translated by John Shelley), Fortress 1974

(3) モルトマン神学と新しい政治神学

政治神学の再興・復権

希望の神学から、後期の組織神学の体系的構築へ

Jürgen Moltmann, "Political theology in Germany after Auschwitz,"

in: William F. Storrar & Andrew R. Morton(eds.), *Public Theology for the 21st Century*,  
T & T Clark 2004.

1-2 : 政治神学と日本の文脈

1. 日本における政治神学の諸系譜

- ・横浜バンド・日本基督教会・東京神学大学

植村正久、熊野義孝、大木英夫、近藤勝彦、深井智朗

- ・日本組合教会・労働者伝道 → 関西労伝

海老名弾正、渡瀬常吉

- ・無教会とその周辺

内村鑑三、矢内原忠雄、南原繁、飯沼二郎、宮田光雄、千葉眞

心の純粹さと合理的批判

千葉眞「非戦論と天皇制問題をめぐると一試論——戦時下無教会陣営の対応」

『内村鑑三研究』第40号、88-133頁、2007年、キリスト教図書出版社

- ・キリスト教社会主義・労働運動

片山潜、石川三四郎、安部磯雄、木下尚江、賀川豊彦、日本社会党との関わり

2. キリスト教との関わりにおける近代日本の政治的争点

- ・明治、近代化

欧化主義から国粹主義へ、国家の近代化

- ・大正デモクラシー、社会主義

「キリスト教の私事化、内面化は避けられなかった。草創期にみられた、キリスト教を近代日本形成の精神的基盤とする考え方は、キリスト教が天皇制国家に忠実な宗教ということで落ち着いていった。それと並行して、キリスト教は個人の内的煩悶や葛藤を解決する精神的指針や人生観を提供する宗教になっていった。これが教養主義、文化主義といった思想風潮によって助長されたことはいままでのない。つぎに、青少年時代にキリスト教に入信した場合、大人になり、社会に出たとき、キリスト教も卒業する信徒があらわれた」（第七章 大正期のキリスト教界、土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、229頁）

1925年：普通選挙法、治安維持法

後の「宗教団体法」（1939年）への動き、宗教法案(1927、1929)とその廃案

- ・戦争、天皇制

上からの国家主義と下からの国粹主義、

- ・戦後民主主義、政教分離、平和憲法、愛国心、靖国

戦後と戦前との連続性と断絶

### 3. 政治神学の一系譜

大木英夫 『新しい共同体の倫理学 基礎編 上下』 教文館 1994年

近藤勝彦 『デモクラシーの神学思想——自由の伝統とプロテスタンティズム』 教文館  
2000年

#### 第 III 部 日本におけるデモクラシーの神学思想

##### 第一章 植村正久における国家と宗教

「植村の国家論の特徴は、概してイギリス自由主義の立場で理解された立憲政体の立場である」、「文明開化の横浜における「英学」との出会いから、さらに最初の英米遊学（一八八八年）において、植村は「イギリス発見」の経験をしている。また彼が愛読していた二つの週刊誌「The Spectator」と「The British Weekly」からの情報は、彼の「教会と国家の神学」におけるアングロサクソンの姿勢の形成に貴重な影響を与えた」（399）、「植村が国家目的としている「自由」は」「霊性の自由」に基づくという仕方で「キリスト教的自由」による根拠づけを要請するものであった」、「キリスト教化」との結合によって成立する「自由」（400）、「神の主権、キリストの王権の立場から、国家の相対性を明らかにした」、「植村の国家論のこうした神学的性格は、ルター的な「二王国論」というよりは広義の改革派的なセオクラシーの国家論である」、「良心の自由」「信教の自由」「デモクラシーの国家」の主張と結合したアングロサクソンの、ピューリタンの新カルヴィニズムの国家論である」（402）、「植村の国家論は、広義の改革派的な国家論の立場から、現実の明治国家を批判し、健全な国家形成を追求したものであった」（403）

「自由教会」（417）、「国家からの自由独立」「国家神道の否定だけでなく、国教会体制を原理的に否定した」（418）

「国家としての日本」「近代化を途中で挫折せしめた結果」「歪曲した近代化の結果」（421）

深井智朗 『政治神学再考——プロテスタンティズムの課題としての政治神学』

聖学院大学出版会 2000年、236頁（あとがきなどを抜いて）

プロローグ——プロテスタンティズムの課題としての政治神学

第一部 コンスタンティヌス体制とその残像における政治神学（政治神学タイプA）

第1講 『政治的問題としての一神教』と『政治神学』

第2講 カール・シュミットの『政治神学』

第3講 ハンス・ブルーメンベルクの問い

第4講 エルンスト・カントローロヴィチ

第5講 『王の二つの身体』

第6講 政治神学のドラマツルギー

第7講 ハンス・ケルゼンの『神と国家』

第8講 神と国家

第9講 エルンスト・カッシーラー『国家の神話』の立場

## 第二部 プロテスタンティズムのアングロサクソンの展開における政治神学（政治神学タイプB）

第10講 中間的考察

第11講 プロテスタンティズムのアングロサクソンの展開における政治神学

第12講 二つのテオクラシー

第13講 「被造物神化の拒否」の帰結

第14講 二つのデモクラシーの伝統

第15講 デモクラシーとピューリタニズム——A・D・リンゼイの視点

第16講 近代世界と自由の問題——H・ブルーメンベルクとP・T・フォーサイス

第17講 宗教なしに社会の統一は可能か——W・パネンベルクの視点

## 第三部 日本における政治神学の問題

第18講 カール・バルトと日本のプロテスタンティズムの政治神学

第19講 日本の教会の母体としてアメリカの教会

第20講 一九四五年以降の日本の社会と宗教——W・P・ウッダードというサンプルエピソード——ラディカル・プロテスタンティズムと政治神学

「政治神学」の定義「しかし仮に「政治神学」ということで意味していることをもつとも広義にとって、「政治と神学との関係」、あるいは「神学における政治の問題」及び「政治学における神学の問題」と考えるならば、そこには明らかに大きくわけて二つの類型を見出すことができるというのが本書の立場である。本書はその類型化を「教会と国歌との関係」という視点から試みた、「とりわけ日本のプロテスタンティズムにとっての「政治神学」とは何かということについて考えてみたいのである」、「社会学や政治学等との対話のための基盤を神学の側にも用意したいと考えた」(11)

「カール・バルト左派の政治神学のこと」(12)

「キリスト教がローマ帝国の公認宗教になることで、キリスト教は事実上かつてのローマにおいてこの種の政治神学が果たしていた役割を引き受けることになった。この構図を指摘したのがエリック・ペーターソンである。ユルゲン・モルトマンはこのようなペーターソンの理論を受け入れ(14)、「いわゆるコルプス・クリスチアーヌムの形成の必要条件」、「このような政治神学によって基礎付けられたキリスト教世界の体制は少なくとも宗教改革の時代まで続くことになる。王権と教権との闘争や宗教戦争の名を借りての国家間の闘争にもかかわらず、そこにはなおコンスタンティヌス体制が存在していた」(15)、「コンスタンティヌス体制の崩壊は、ルターの宗教改革によってではなく、一七世紀における宗教改革のアングロサクソンの展開の中で生じたと言ってよいであろう」、「もはや教会は国教会ではなくなる。その時に政治神学はこれまでの伝統的な、いわばコンスタンティヌス体制を保持するための原理としての政治神学というものではなくなるのである」、「政治神学のもうひとつの新しい展開」(16)

「国体カルト」、「日本の政治神学を批判した日本のプロテスタンティズム」「カール・バルトの政治神学」、「それはまさに矛盾」(18)、「なぜならそこにはコンスタンティヌス体制は存在していないからであり、むしろ一九四五年以後の日本はそれらを否定した社会システムによって規定されているからである」(18-19)、「近代以降の社会は世俗化という現

象にもかかわらずプロテスタント的な深層構造を持っているのだ、というプロテスタント的な現実認識と関係する「政治神学」(19)、「日本社会が必要としている「政治神学」(20)

「原始キリスト教がイエスのラディカルな終末論に規定されていたことは周知の事実である」(29)

「戦後日本の政治システムの変化」(174)、「バルト研究やバルトの政治的な主張の紹介と日本の教会の現実との間にあるズレが生じた」、「バルトのそれは既に見てきた通り、いわゆるコンスタンティヌス体制の残像のもとでの神学であるのに対して、一九四五年以後の日本の教会は教会と国家との分離の原則のもとに置かれているのである」(175)

「アングロサクソン世界を経由して西周りでやってきたという事実」、「それが日本の多くのプロテスタンティズムの歴史的な源流なのである」(178)

「アメリカは信じる自由や人権というプロテスタント的な文化的価値をもって建国された国であり、それがアメリカの伝統であることを思い起こさねばならない」(182)

「日本における政治神学の課題」、「それ故に日本におけるプロテスタンティズムの政治神学は、その理論的な構築のみならず、他方でこの日本の社会が持つプロテスタンティズムの深層構造を社会に対して弁証(アポロゲティーク)し、またプロテスタンティズムそれ自体にそのような自らの伝統を認識させるという課題を持つことになる」(185)、「この社会システム自体がプロテスタント化している、あるいはプロテスタンティズムに規定された文化価値がグローバルスタンダード化しているという前提のもとでの議論」(185-186)、「エルンスト・トレルチは新カルヴィニズムについて論じる中で」、「ここでいう意味でのプロテスタンティズム化」(186)、「具体的には日本のプロテスタンティズムの政治神学の課題と内容とは、徹底的なプロテスタント化という意味での「ラディカル・プロテスタンティズム」という考え方に結びつく」(187)

「GHQの出した「神道指令」、「日本という国家の機構を根底から変革するような出来事であり、教会と国家、あるいは宗教と国家という問題におけるパラダイム・シフトがまさに起きたのだと言ってよいであろう」(188)、「W・P・ウッダード」、「ウッダードの「神道指令」解釈」

「社会の深層構造のプロテスタント化に他ならない」、「このような社会構造の転換が認識される場所では、われわれがタイプBの政治神学として提示してきた道は、日本におけるパブリックな政治神学となることができるはずである」(196)

#### 4. 批判的コメント

- ・意欲的、先見の明がある問題提起
- ・近代の多様性

ドイツ型、アングロサクソン型といった仕方では真相に迫れない  
同じ限界を突破できない

- ・タイプAとBとは、ゼレやモルトマンの言う「古い政治神学」と「新しい政治神学」との区別・対照の議論とどのような連関にあるのか。
- ・アングロサクソンのというわりに、英語圏の政治思想、政治哲学そして神学への言及はほとんどない。ドイツ語圏中心。

- ・日本の状況への言及は意外なほど少ない。

日本の宗教状況とその政治的連関への考察の不足 → 日本論という課題

「日本」とは何か？

トレルチの本質概念論

原初・起源的状況への還元に対する批判

## 5. 日本における政治神学の構築に向けて

近代日本における天皇制の意義・機能

日常的現実と包括的コスモロジーの基盤

理論から感性レベル、個人から共同体におよぶ影響

## 6. 近代日本の宗教状況

重層性

表面的な断絶と深層の連続性

宗教概念の変形 → 現代の問題状況

キリスト教受容の問題として

キリシタンをめぐる江戸幕府の宗教政策

仏教の非政治性

近代国家におけるキリスト教容認の要請と日本の形成

神道は宗教にあらず

近代化内部の緊張構造

欧化主義と復古主義：西欧的な立憲君主制と天皇中心国家

下からのナショナリズムと上からのナショナリズム

下からの動きを上からの回収し利用する

下からの動きによる上からの動きの変形

## 7. ティリッヒのプロテスタンティズム論

批判と形成、超合理と合理

4つの契機の統合

合理的批判（イデオロギー批判・社会学的批判）

合理的形成

超合理的批判・預言者的批判（宗教社会主義）

超合理的形成・恩恵の形態

形成論が批判を支える（単なる批判ではなく具体的な対案を示すこと）

超合理的なものは合理的なもの歪みを批判しそれに誠実さを与えること

によって、合理的なもの根拠となる

芦名定道 「P.ティリッヒのプロテスタンティズム論の問題」 『日本の神学』第25号  
日本基督教学会、1986年 pp.43～71。